



揚州 ちうけい 志の

高解 華の 嘉塚

芳川 春橋 園

ちうめい ちうけい 志の 志の

浮むら 回 結 志の

ちうめい ちうけい 志の 志の





澤村田之助曙草

三編上

A497  
3

48-8188



あまのほの

さくら

編

上の巻

多辨  
みね

あまのほの  
さくら

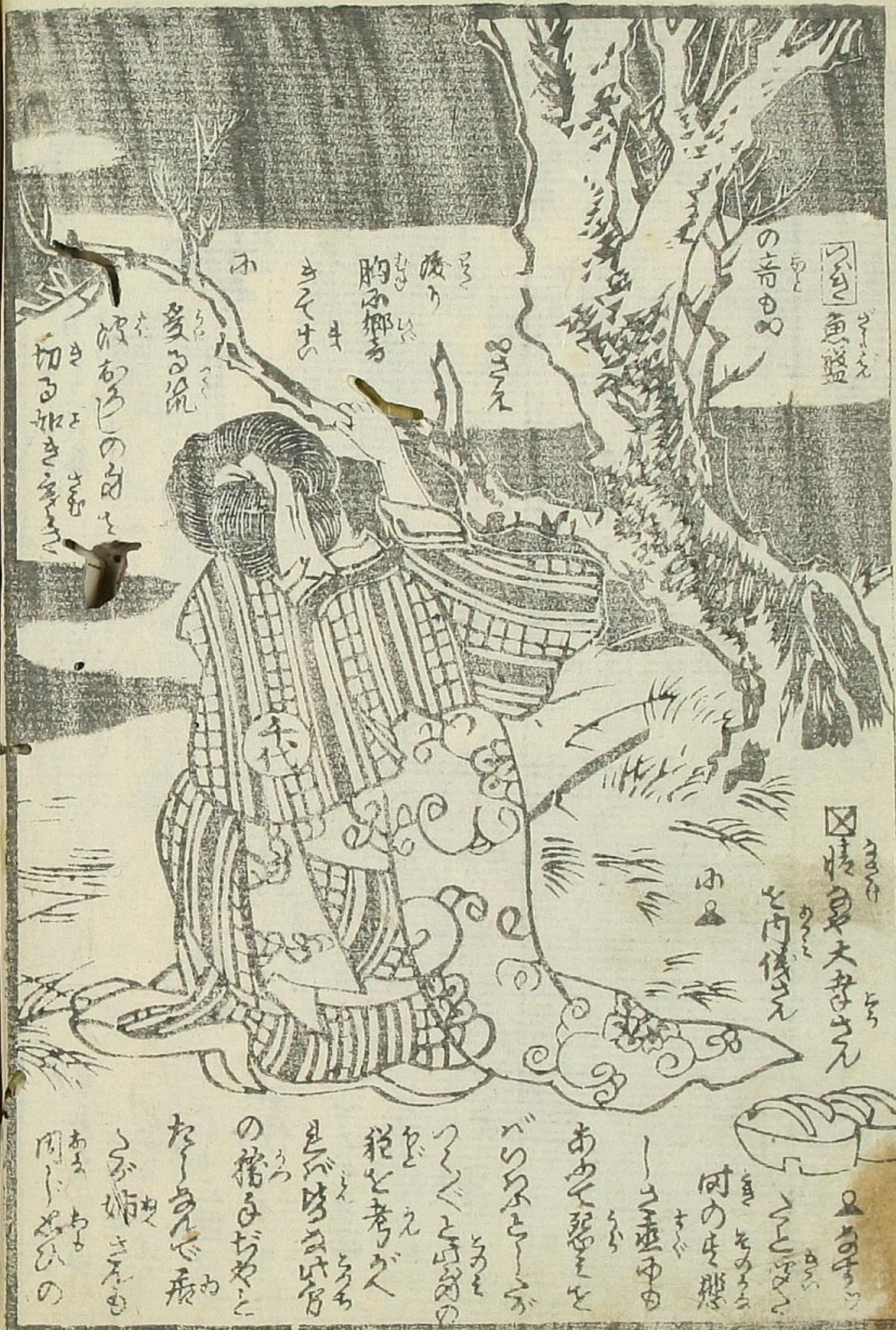
君が一夜の情の妻が百年の命を絶と云く名お大磯の席りも中さ  
下手が画か似たり猫と異名を鳥が鳴く東の都乃浮薄社会乃  
中や本編の千代吉が糸を籠る呉竹の最も愛く直ちありく  
志探糸席ふからざるも彼の名を坊の富嶽より多し是れ身を  
三圍の堤下沈めく雲と墨院の修を爰小判然示た似るい淫奔の  
冥罰毫も異しむみ足ねと罰何れ賞ある天地の道理独り代吉が  
孝子百松と恵し賞へのふある記者も未ご之を辨るる能を  
乞ふ編を重ねくのち勸懲の意と了せしとよい尾那とも希の  
尾後を曳く作糸帯の長くの巻覧と新かかると見たり

明治十三年九月

岡本起泉題







ついでに魚盤

の昔の

情も大きき

と云ふ

何のそ

あつて

ついでに

能と考

の猪

た

か

あ

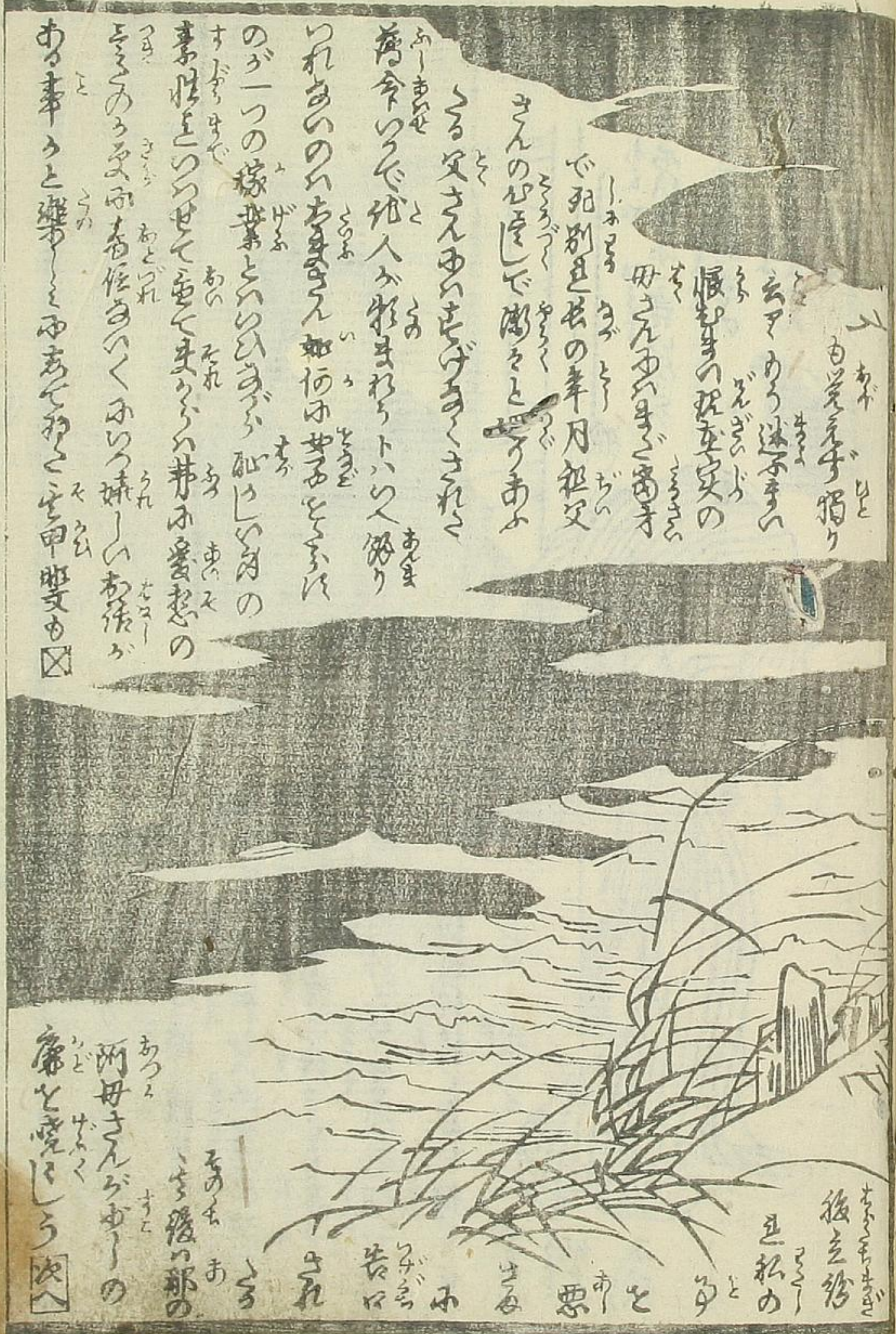
用

の

の

の

の



後

は

と

思

ふ

小

は

さ

れ

の

部

の

の

の

の

△ 水もたれと田に秋も月も  
 づり水もたれと田に秋も月も  
 うらなを流し清き水と身を清  
 てけ上りおれむい西方除障如來  
 現せし不孝小娘とよも来世と  
 救ひ出られと命奪はて服と閉ぢ  
 小娘ぬ死後て身を醒させ  
 サングと死入々  
 水考と  
 死志  
 小娘  
 一々  
 何と云



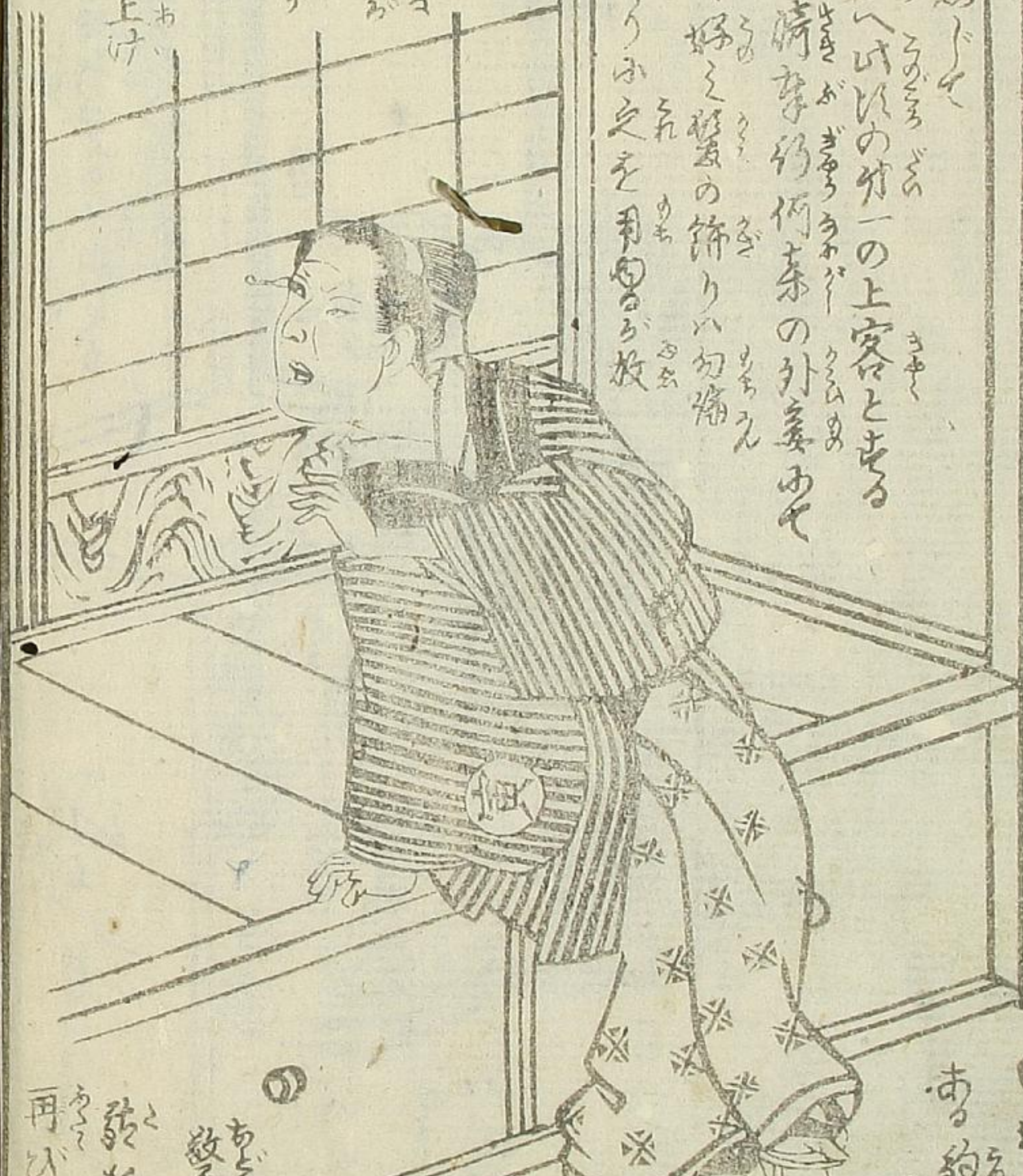
△ 水もたれと田に秋も月も  
 づり水もたれと田に秋も月も  
 うらなを流し清き水と身を清  
 てけ上りおれむい西方除障如來  
 現せし不孝小娘とよも来世と  
 救ひ出られと命奪はて服と閉ぢ  
 小娘ぬ死後て身を醒させ  
 サングと死入々  
 水考と  
 死志  
 小娘  
 一々  
 何と云

△ 水もたれと田に秋も月も  
 づり水もたれと田に秋も月も  
 うらなを流し清き水と身を清  
 てけ上りおれむい西方除障如來  
 現せし不孝小娘とよも来世と  
 救ひ出られと命奪はて服と閉ぢ  
 小娘ぬ死後て身を醒させ  
 サングと死入々  
 水考と  
 死志  
 小娘  
 一々  
 何と云



△ 水もたれと田に秋も月も  
 づり水もたれと田に秋も月も  
 うらなを流し清き水と身を清  
 てけ上りおれむい西方除障如來  
 現せし不孝小娘とよも来世と  
 救ひ出られと命奪はて服と閉ぢ  
 小娘ぬ死後て身を醒させ  
 サングと死入々  
 水考と  
 死志  
 小娘  
 一々  
 何と云

つぎお代は  
かゆ出し小島  
ゆえとまるあへびの竹一の上客とせり  
お代とて長崎守の何茶の外妾ゆ  
珊瑚珠と漆く好く髪を飾りハ勿落  
持物那の飾りハ之を利由に放  
せんと御号  
お代人御号  
一々珊瑚珠  
お代とて長崎守の何茶の外妾ゆ  
珊瑚珠と漆く好く髪を飾りハ勿落  
持物那の飾りハ之を利由に放  
せんと御号  
お代人御号



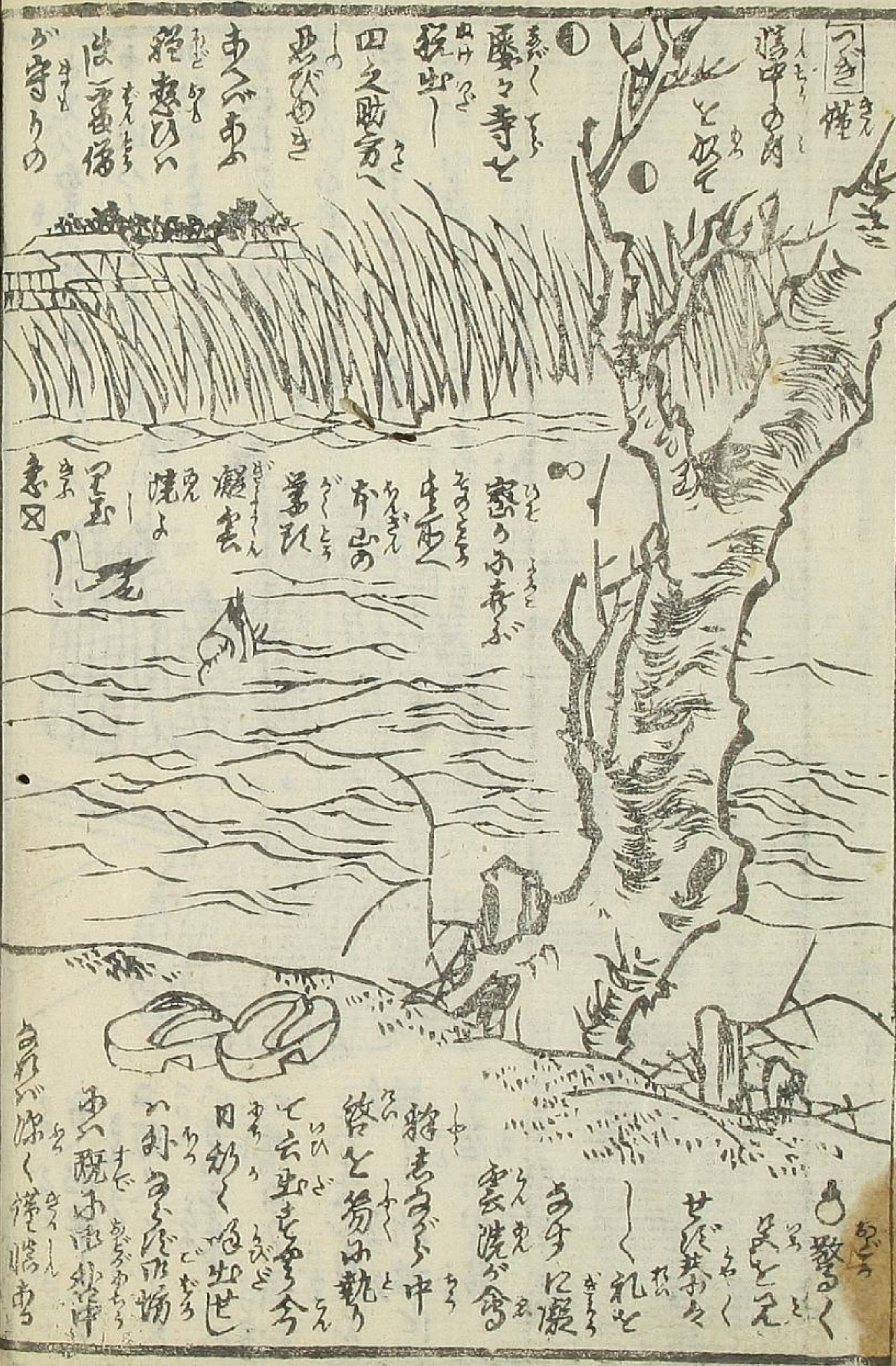
① 造り小後  
お代とて長崎守の何茶の外妾ゆ  
珊瑚珠と漆く好く髪を飾りハ勿落  
持物那の飾りハ之を利由に放  
せんと御号  
お代人御号

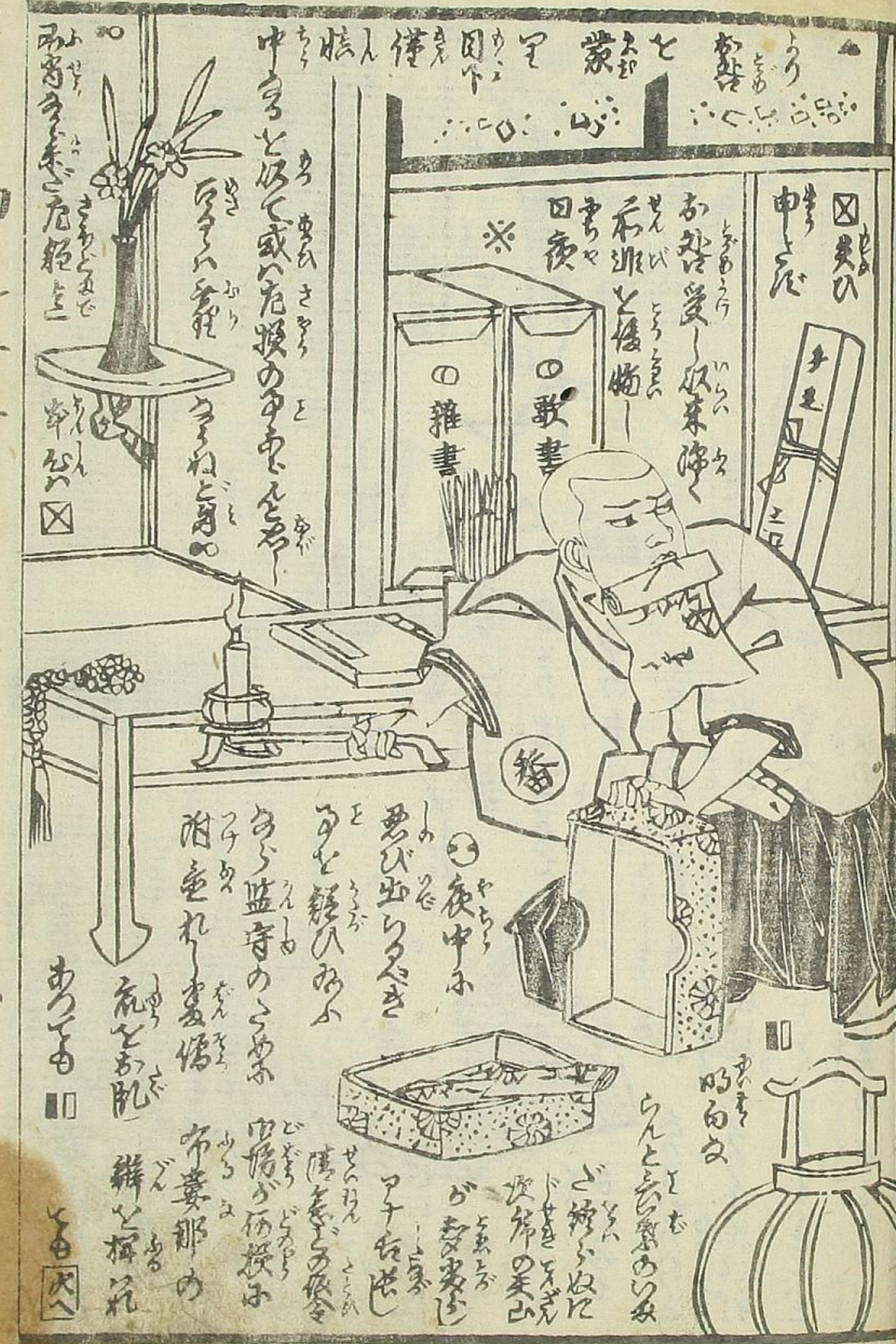
と先づお代はの件へ初りて  
かゆ出し小島  
ゆえとまるあへびの竹一の上客とせり  
お代とて長崎守の何茶の外妾ゆ  
珊瑚珠と漆く好く髪を飾りハ勿落  
持物那の飾りハ之を利由に放  
せんと御号  
お代人御号



お代とて長崎守の何茶の外妾ゆ  
珊瑚珠と漆く好く髪を飾りハ勿落  
持物那の飾りハ之を利由に放  
せんと御号  
お代人御号







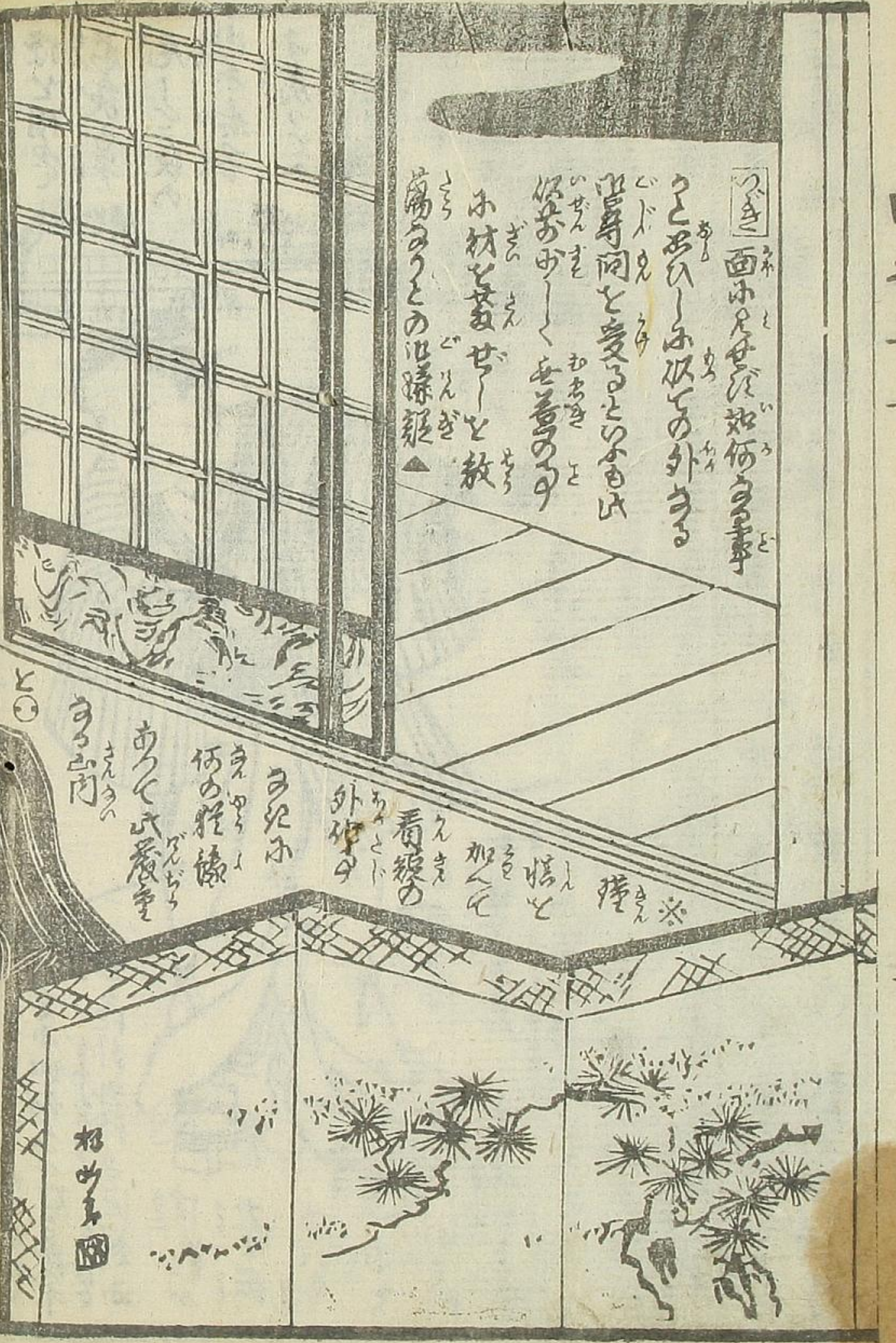
中身と似て或は花扱の中を...  
...  
...  
...  
...  
...

両寄り...  
...  
...  
...

申す...  
お世受し...  
...  
...

夜中...  
...  
...

あつても...  
...



面...  
...  
...

外...  
...  
...

...



十七八の小姓が何と申  
 のらぬ様中より取返し  
 一通の虫状を紙  
 函院が書入見  
 虫めぞ  
 観  
 次へ



又吉小  
 托し紙か  
 お知れぬ  
 のえ  
 舞と  
 送り  
 向の  
 紙あて  
 又吉小  
 托し紙か  
 お知れぬ  
 のえ  
 舞と  
 送り  
 向の  
 紙あて

田  
 三  
 三

一、（？） 征伐ありて中へ直にひらりて去るは物なほ  
 とありての余は承平と妻は梅と遊んでゐるに  
 老がは増える征伐とほりて秋は月夜五日を夜  
 由更て妻の下の羽の羽果して  
 夢まゝの心はゆる車板  
 越えぬをね傷物と物遠なる  
 生人をもあふふ今又持て候へ候と  
 恨むれどゆく面もては泣きとく  
 ねと更家の持世は只家室の累  
 泣かぬと膝と膝とあふふんぬめて  
 美足とせんあはれあはれと膝拂ひをせんと  
 隠るるをえを隠るるをえひふ柳むねへ通る  
 うすし雨の婦人が是れは燈打の火に



一、（？） 是と情の面と恨  
 一、（？） 雨もあつくと燈打  
 と打あつてと  
 一、（？） 恨みは  
 一、（？） 恨みは  
 一、（？） 恨みは  
 一、（？） 恨みは

芳川春海 因本起泉作

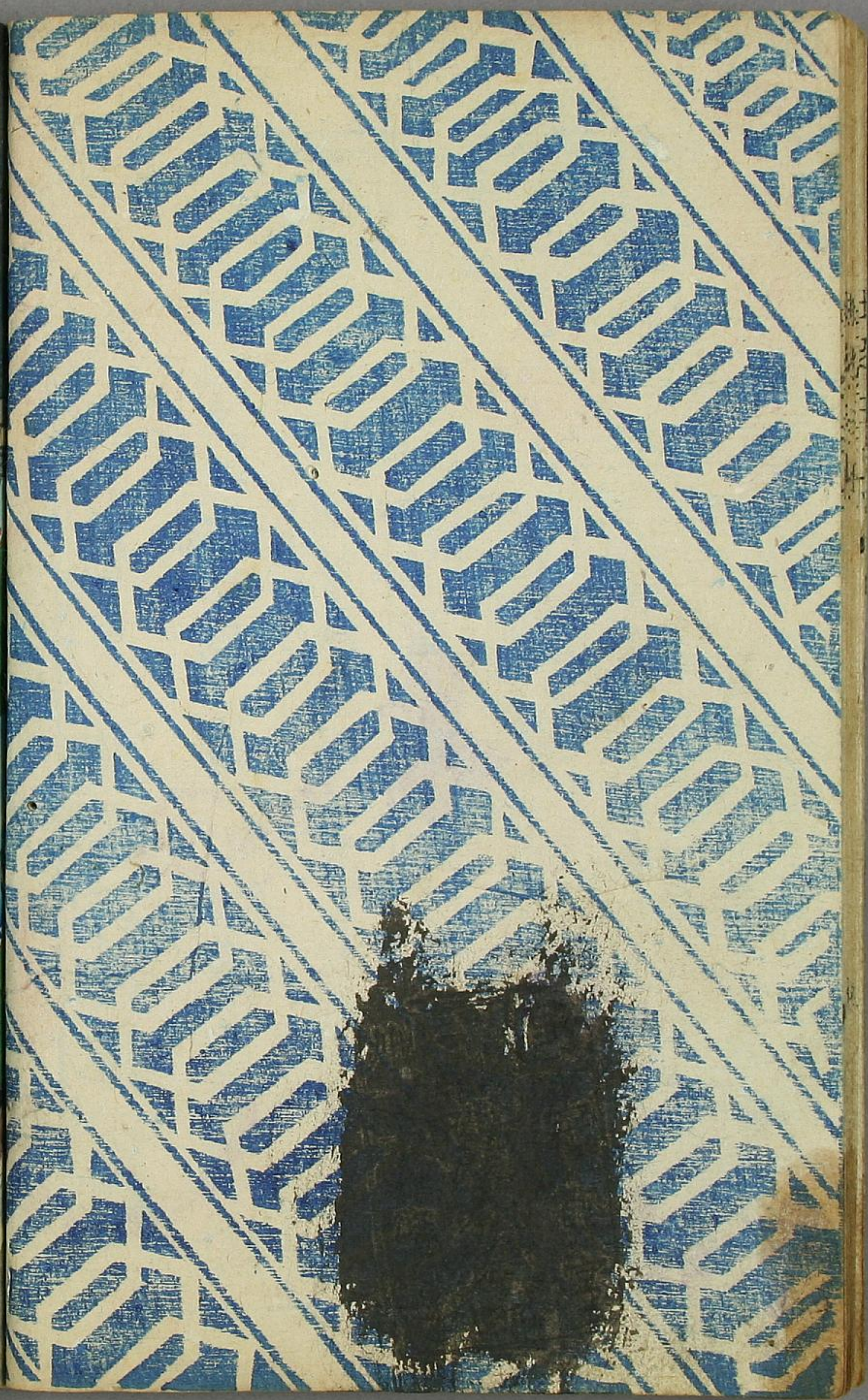
幻阿竹噺聞書三編	御所櫻梅松録十五編
川上行義復讎新話二編	名所東京新圖
澤村田之助曙草紙五編	武者切附本品々
坂東彦三倭一流三編	新形折本品々
白菅阿鯨系顛末三編	石榴略曆品々
島田一郎梅雨日記五編	作者 岡水勲造
其名高橋主母婦小傳七編	浅草瓦町十一番地 板主 綱島龜吉

揚州周延畫



芳園春濤閣  
岡本起泉終

三  
六  
七

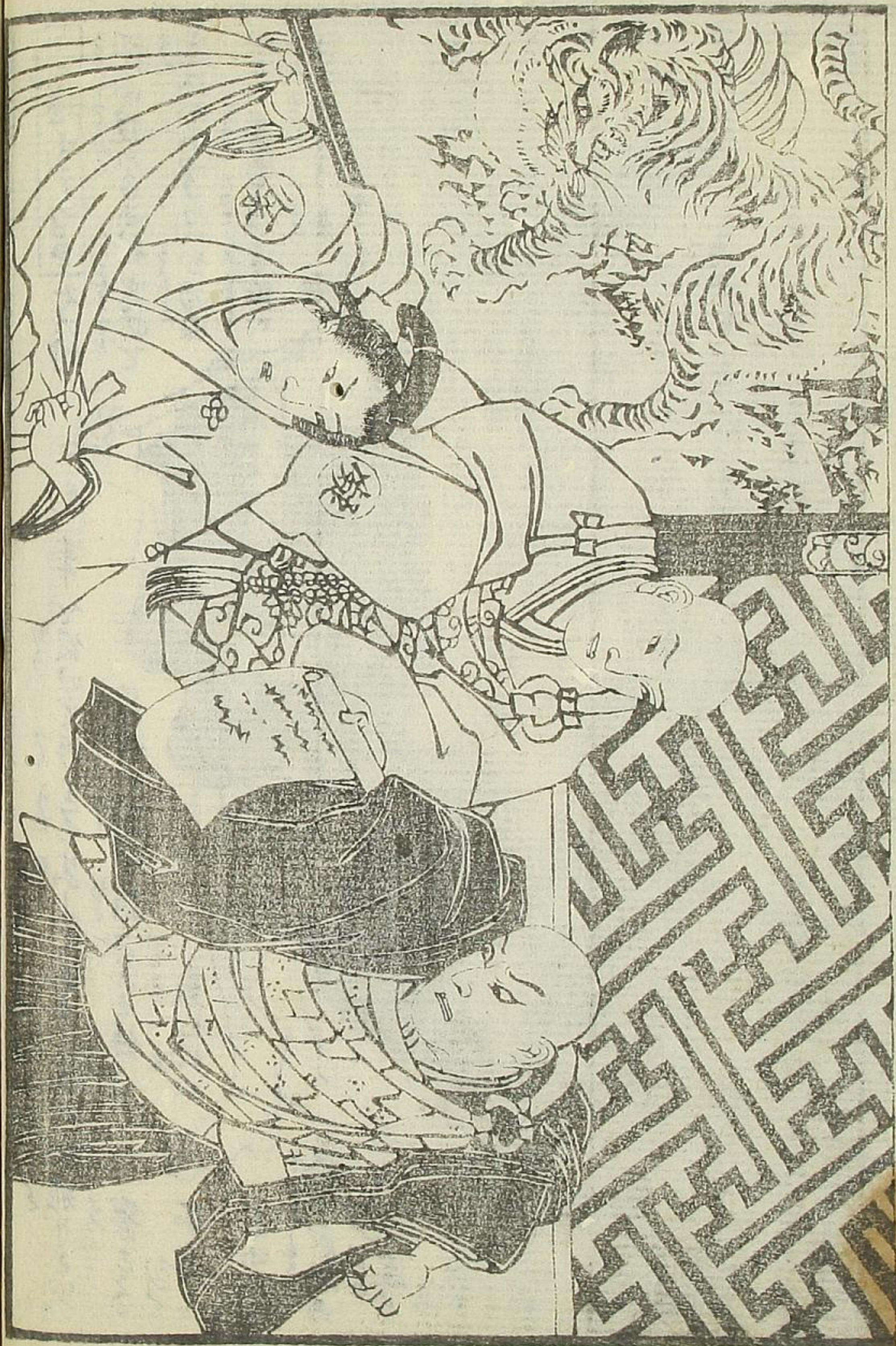
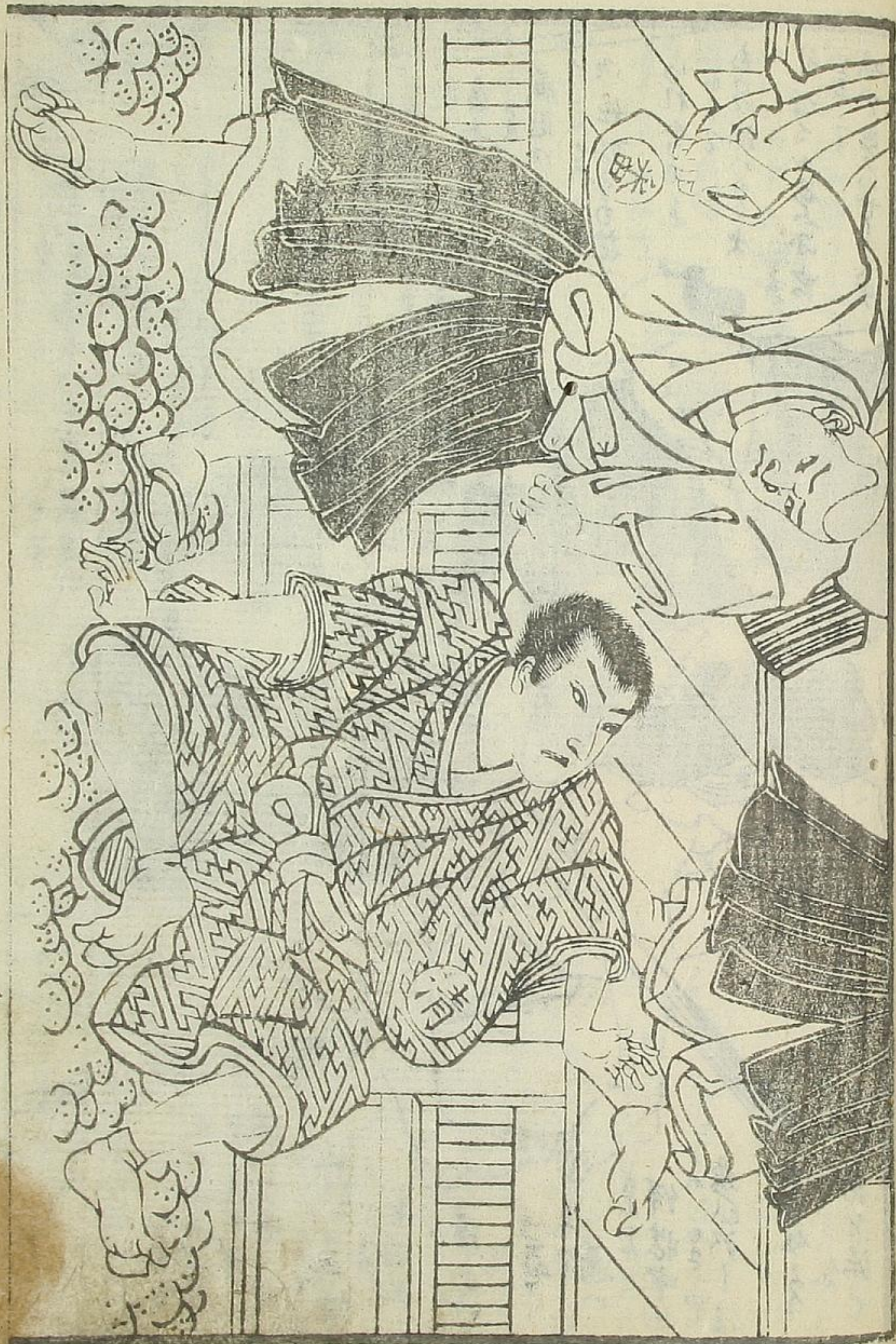


上の巻のうらさきその時  
 櫻山院のふ村史と  
 赤ふかのうらさき  
 今の一条むすむは  
 候の若より  
 取披見せし件  
 紅梅の  
 あり再び願  
 一吊審のつ小首と  
 傾け獨り長所を  
 院の方より只今  
 陣連世車扱と  
 身ふとの  
 一せりするきを  
 車と扱けり  
 思儀と  
 一  
 方由  
 異  
 通  
 の  
 友  
 之  
 一  
 二



曙さくら  
 村田之世  
 中  
 三編  
 の  
 夕  
 夕  
 夕





田代三十五

つぎに在るは、いづれか、武田の  
徳主と好むのとう不都合の  
原ありとて、以て先年



又唯々送るるを  
長ふまると天山と  
原田にうけ「執事」  
以て切あも抱へ  
られ今日と  
も君仕のり次  
分るるがふふお  
咳とせしせし

●ふふ執事  
院へ出強しと  
持し「執事」  
とて出  
淡あけ  
さそ  
一週ハ  
備懐申不  
あひのり「信  
田のぬより  
物を編て



と遠極の極き  
お知れ申ふ極  
優る「君信」  
送りし「信」  
如何し「ささふ」  
と書ひ「巧」  
を掃つて「思」  
と「花」  
條の事とあられ「う」  
此「賢」  
面「入」  
「ま」  
られ「る」

送りし「信」  
中「小」  
お「歩」  
し「の」  
と「急」  
せ「れ」  
あ「ら」  
か「ん」  
い「ゆ





つぎ死  
 とあるを  
 母ハコハ中業中の  
 ののまうと  
 高由藤止  
 かるを越衣洗の替と押とめて

相子の惚儂とのり  
 由て只具須あさ世  
 のとるれが来と寺法  
 と破じとりのあもあは  
 又昔年の  
 脚の  
 山との  
 世の  
 せ一始が祖父と共に昇ね  
 来一と館あく遠度世  
 り由来て衣新のせ一



何と心一いや清志どの先づ替りく  
 邪志と退け愚信が言と苦とまれよ  
 此坊の性賢英敏を併道も既不  
 極真と究められ成ゆて  
 定規と踏本平く  
 一院の位職ともま  
 是経由也  
 ぬくくハ  
 去る大寺一  
 あやさんと既不  
 内儀もありしちまふ系  
 如何なる天磨を魅入一ちあひく  
 不都合なる風俗ありま々探索と致せると

先達既性のこと  
 今更  
 外に如何  
 とお持産不  
 進を放蕩に  
 募り出家は  
 あらぬ以状が万一寺社持  
 の身もあまらぬ山の外  
 此の坊の為と云ひ僅信を

申し付ら世へ交換の義  
 悪くせし情が改むを後世に  
 尚書にぬると情は斯くを悪  
 多の情のあつたるに一途の  
 迷ひ不嚴なる命を破るは  
 今後の路末は嘆くを

解られれば方角を十  
 分採候と云はれ  
 又世をぬらうとも  
 高徳使と上旨と  
 さらば世の情のよむ世  
 ありともよむを解しゆくせ  
 考へてあらぬと申されぬ



○懺悔  
 て只此の  
 心と改め再  
 び清浄を成  
 のよとあり  
 結果と  
 待る  
 軽やそれ何  
 小とらり懸  
 りを論と考  
 け流石の観心  
 院由不慮

あふの面用不揃つるとも  
 ときば舟を前のも敷と  
 纏て田之助  
 め経師屋又表  
 その此の者一同  
 と申せして冥金を  
 吟味と校書の外あり  
 勘る時へは情の如きと  
 云はれせし上まのの人々  
 あり感と云はねばあは  
 人ふ兼儀と掛るのよむ  
 とあふまをあるが如家  
 の角して死ふ罪と云ふ



再び返す相  
 由なく悲不と  
 伏罪世  
 即ち枝  
 小儀と  
 小儀と  
 小儀と  
 七刺面  
 色を竹葉門  
 あり逐拂はれ  
 清浄の心と考  
 ありされぬ角  
 由経師屋又表

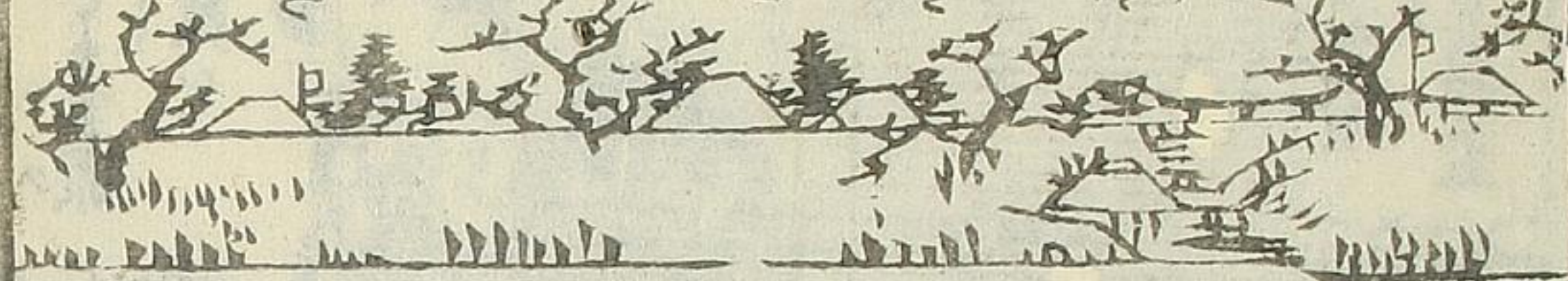


△次方と

船がぬ  
ハ知て  
森ハ  
又千代古が  
自投せ  
みのも  
小掛る  
ののろ

ねど小懸ハ此の  
の方ハ由考伝  
○肉つと小懸  
かめ

つぎ 船で舟の舟をせ  
せと海客葉茶揚り  
そとと尊ねに又  
まをまの十の程茶の散り  
我物言は海客葉茶揚り  
又を大船小付世帯せり  
船めく同地へ出せ世と  
のり小老く力と揚  
は依りて田之助方  
乃はと途方ふれて  
あこりりる○夜ふま  
この舟をせんす  
田之助ハ親正改が  
来まありと新る△



○丸ちあて  
ぶらぶら  
とら小腐の  
やうに  
小



くまり  
次方小  
旗の重く△

△さ  
か  
とら  
田之  
助  
の  
其  
次  
方  
の  
重  
く  
△

拍もあつた手  
 又喜の狂女と云ふ  
 仇の何うひそく  
 宿せしつとて花元  
 合あるゆを相ま  
 日教さく押垣り  
 又も誰さ花の  
 何と白忙しき  
 嘆かす放ふは  
 中中不  
 七つれあ  
 自由と知ら  
 鳥の  
 ぬ人々又花か  
 西平志をさう  
 とく今戸の  
 料理屋有  
 楊ゆに用き

舟の目も川越  
 ぬらんす  
 舟の目も川越  
 ぬらんす  
 舟の目も川越  
 ぬらんす



宴會の席へ  
 小舟も目見花  
 強され之酒の研  
 七曜さるゆのと  
 酒田小舟に二番  
 の標干ふ係とく  
 川舟小面と云ふ  
 何と云くえ下を折  
 山谷の奴者  
 舟の西岸うた  
 向紙一の船の中  
 助分は家席で又  
 係判する情先



料理屋の養生  
 舟の目も川越  
 ぬらんす  
 舟の目も川越  
 ぬらんす

志女書い

懐中

一通の書封

と取り物

後を由る

被て見え

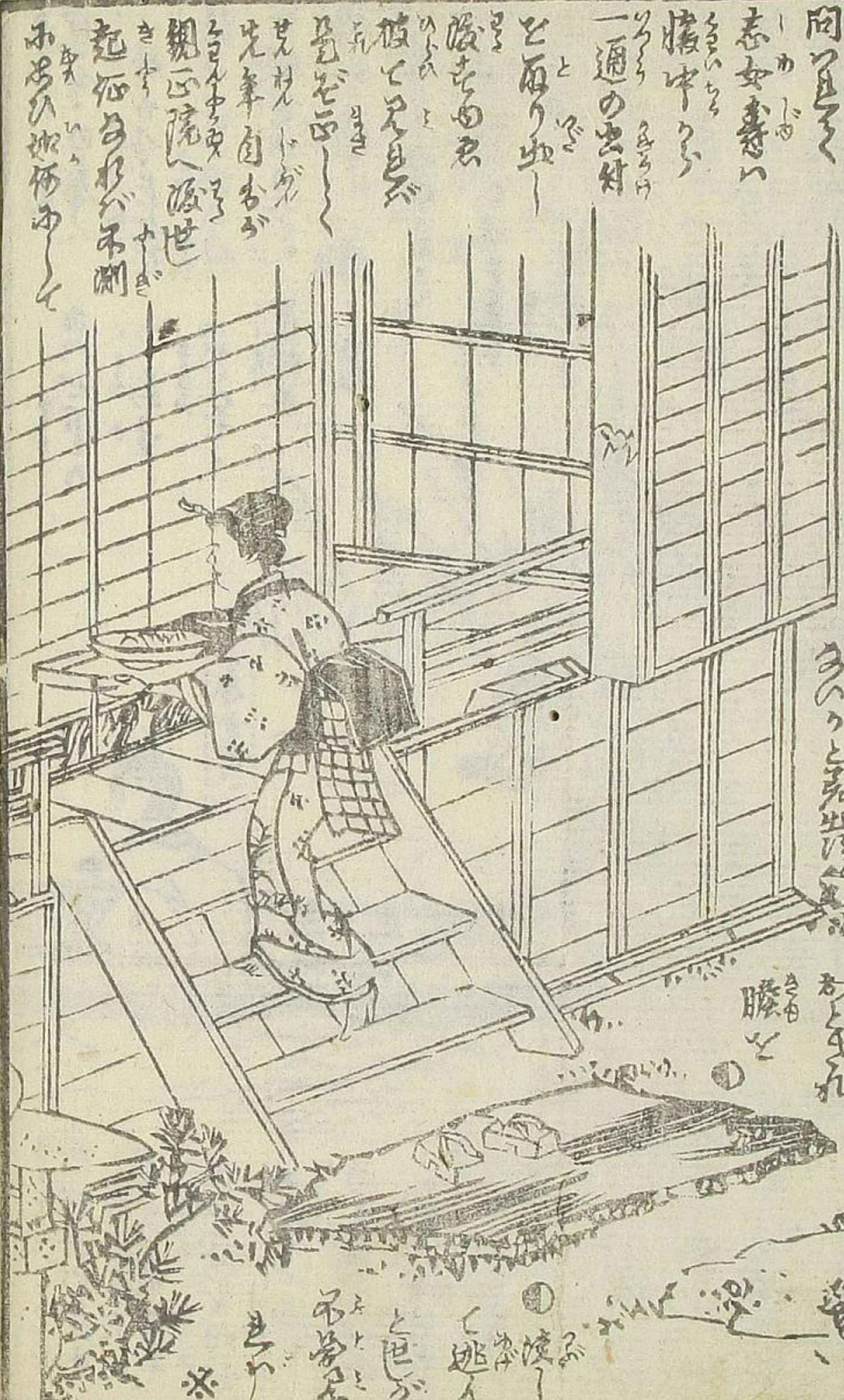
見れば

先年自書が

親正院(後世)

起程の程が不測

おあひだ何ゆへ



若やとて早

あつと

懐中

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

之とあふが

あつと

同いして

教と感め

出付が

仔細とい

十月廿日

板本町の

のぬり

の考と

むかひ

急い

人



志女書

田之

一人

お侍

一人

お侍

一人

お侍

一人

お侍



此画の詠へのちり  
 自ら分るると  
 あり



又どんな  
 又どんな  
 又どんな

又どんな  
 又どんな  
 又どんな

芳川春濤 園本起泉作

幻阿竹尊聞書三編

御所櫻梅松錄十五編

川上行義復離新話二編

名所東京新圖

澤村田之助曙草紙五編

武者切附本品々

坂東彦三倭一流三編

新形折本品々

白菅阿繁系顛末三編

石摺略曆品々

島田一郎梅雨日記五編

作者 岡本勲造

其名高橋毒婦小傳七編

板主 綱島龜吉





鳥鮮堂壽様

三編下





浮世の田の如き

さし

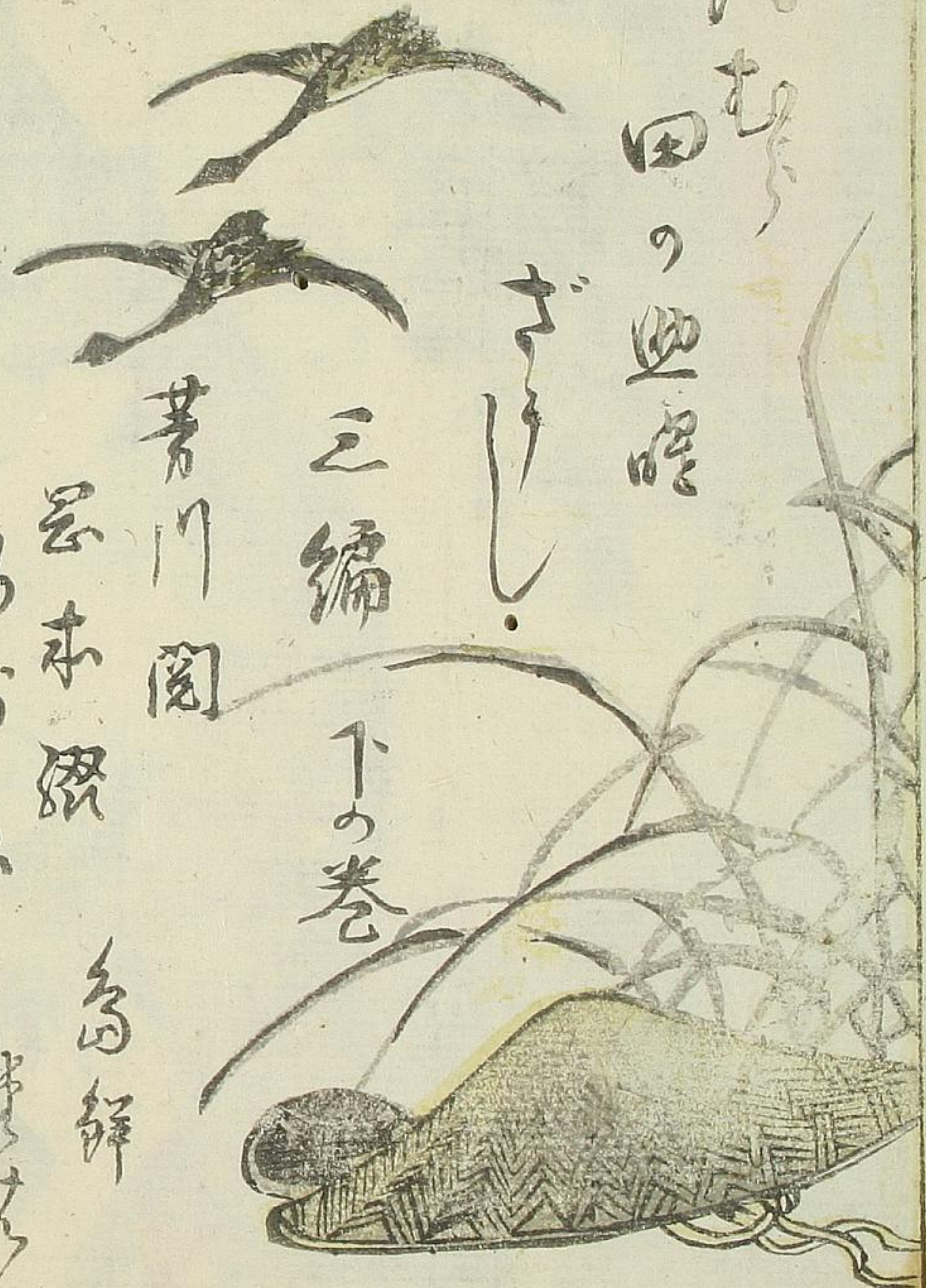
三編 下の巻

芳川園

芸本綴 揚州画

鳥解

半々ん



○鬼南のちさき奉由著世の如く春の夜三半の

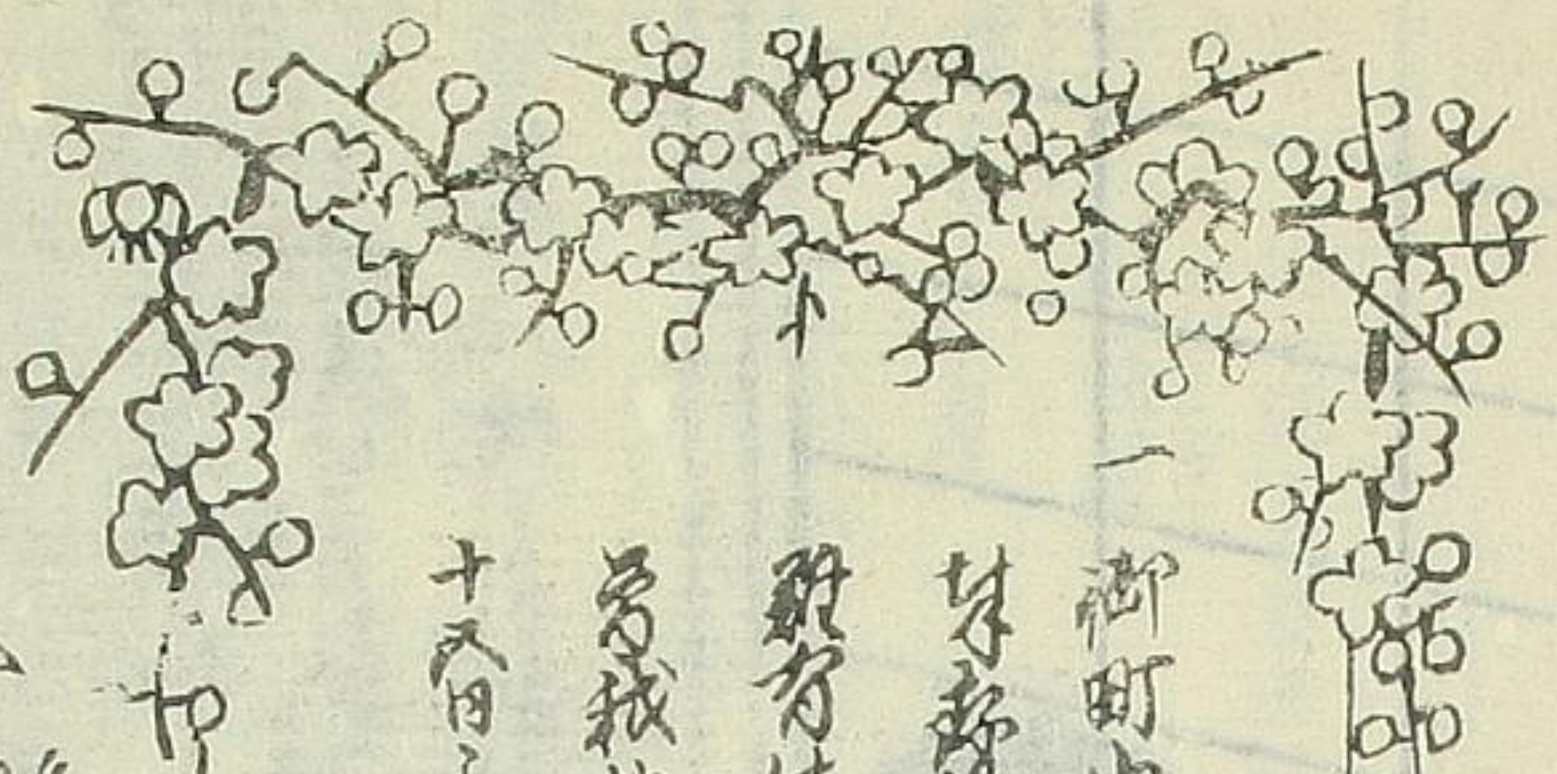
物なき由之候申村人

官陣口上

一御町中候春の夜三半の候は世に候は候  
 御方は合は候外依之候は初春の夜三半の候  
 多秋の夜三半の候は初春の夜三半の候  
 十月より身行は候有承也

あ夫也

月



△秋の夜三半の候は初春の夜三半の候

川中流撈利の由  
 大ありを返す  
 十月廿九日初日の美辰と



日本書紀





守田屋  
小園次  
兼  
△三津五郎  
の甲人ゆであり  
なれば海客なり

○前押柄のちまきがあらば  
てこれとあらば影のけし由と  
逐送さんと出てなれば形こそ  
あつと懸跡と投るを  
兄向かせんはササキ  
兄忘るるもむらうが  
君傍の親近院のまれ

○ま  
がら  
採り入る  
おまふ申  
又と何の  
と假令場  
あつと懸跡と投るを  
兄向かせんはササキ  
兄忘るるもむらうが  
君傍の親近院のまれ

中村屋由身形  
ゆき  
七ツ次田之助  
るち宅の務み  
あつと懸跡と投るを  
兄向かせんはササキ  
兄忘るるもむらうが  
君傍の親近院のまれ



向かせぬ下女の側  
何れもあつと何れもあつと  
あつと懸跡と投るを  
兄向かせんはササキ  
兄忘るるもむらうが  
君傍の親近院のまれ



自つと清の  
もを死  
歩仍り

何れ  
衰へ  
ぬら  
ひま  
△

とあ  
コレ  
思ふ  
今田の  
芝居も  
△  
松子  
△



あまのお清とてい  
身も如く捲入の恨  
せぬれど寺を閉り  
後の僅の細る小舟を寄  
くおもむくをまゆあ  
とあふ内彼の弱り同  
出り同とあふあふ一風  
が家で大熱を好ひ世  
からる大紅蓮地獄の  
妻小寧そのと死ん  
だ家場と初也か  
業のそぬり  
船を小舟れ

出まねがりの  
まゆ中家小舟  
至難仕と  
多り又も路  
路不達  
方定  
今  
の  
あ  
便



内 小

人々が  
好まざる  
ともね  
己を  
おれ  
おれ  
やり  
松平の  
押出し  
かひて  
次へ



本より  
あつた  
あらう  
されと  
掛ら  
とら  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十



ついで内小入るは小竹五む親正  
 院の傍表い忍池ひ内七廻き  
 延と如何に

とせの  
 後世小入る忍池

△食防とめき「あまのり」  
 それれど初が食「あまのり」

之もくんと  
 例へるも

桶の水と  
 突越ふ

ガレバ  
 とうけ

らる  
 清き

がま  
 たるると

△格ふふ  
 箱り法衣を不審ふ  
 あめ性味の人かま  
 止る外はあま

あまの外流ある



○形醜たじう

さると妻ふあふ  
 お遠うの田之助が餅  
 かけぬとあふは是も那奴  
 指家むわらうとまヤレ入ふ  
 怒とあるあふのうま

あふと幸極ぬ  
 内小虎飯あふひ  
 知らせくられんと△

あまのり  
 △

まてスウクと突ま  
 ちととあま

あまのり  
 腹と運ま

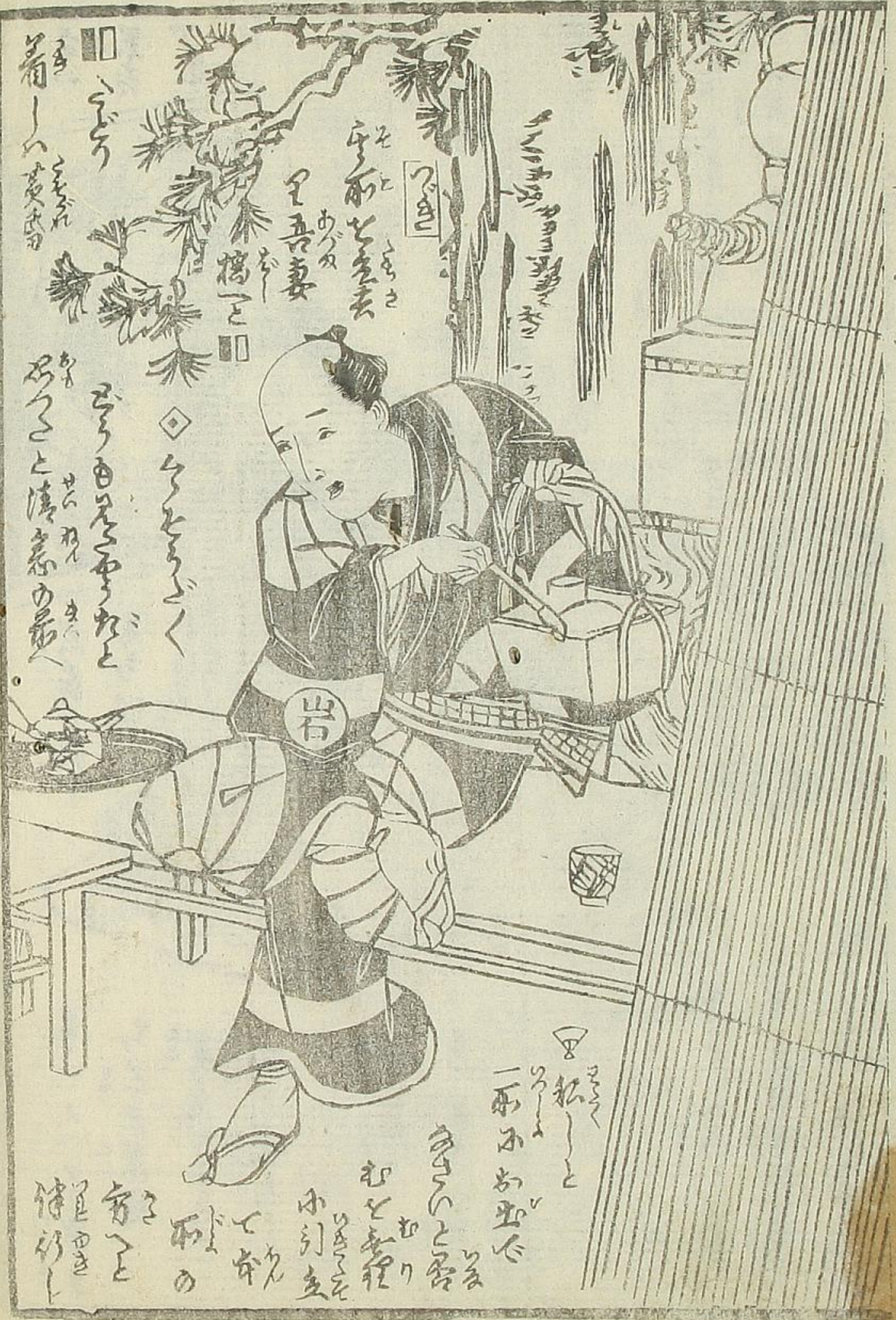
ハツとと睨む面  
 相の睨ろ一ま

あまのり  
 内へ逃入りし縁取

あまのり  
 何の喃や吻やき

あまのり  
 ときある体を杖ふ

あまのり  
 まぐらうらわのあま



着しは黄白  
 小腰と座り  
 松の枝  
 吾妻  
 岩

小腰と座り  
 松の枝  
 吾妻  
 岩

小腰と座り  
 松の枝  
 吾妻  
 岩



海  
 小腰と座り  
 松の枝  
 吾妻  
 岩

小腰と座り  
 松の枝  
 吾妻  
 岩

小腰と座り  
 松の枝  
 吾妻  
 岩

返之助が遠ざかりしと云ふの言はくは女  
 毒とのふ毒花が笑ひし由を突如  
 是こみと一途ふ二人と怒り  
 美い事れどまめめぬ  
 の中のやせせく面白  
 うらね日殺さんまぢと  
 次郎ふあつらう獲の月の中  
 まぢりりり乳冠の尻  
 出て母のお言が着る一回  
 に張しもあつらう実と  
 べお言の驚きも代若さう  
 お家もあつらうと云ふは



返之助は  
 次郎は  
 毒花は  
 二人は  
 美い事れど  
 の中のやせせく面白  
 うらね日殺さんまぢと  
 次郎ふあつらう獲の月の中  
 まぢりりり乳冠の尻  
 出て母のお言が着る一回  
 に張しもあつらう実と  
 べお言の驚きも代若さう  
 お家もあつらうと云ふは

この果れどお言のれぬと獲い  
 多てごま生の子の愛ゆの萌き  
 毒の白の惚りふあふ揃りの娘  
 けー物産ふる選ひもあつら  
 り悔く返らぬゆを  
 れぬ前ふ見方へ  
 候とつて  
 あつらと  
 と小静お作と  
 小静お作と  
 が自分勝手所へ  
 出るゆに物産と  
 一と藤由あつらと



依せい本細と香ゆとぬり代若さうい  
 けいふまかとれ母しれを  
 ねとお方ゆとれしあき今日  
 ぬ田つとを挨拶と  
 出あちぬゆあ  
 くしあゆり  
 道に隠れて  
 長七お言が  
 通るもあつら  
 引捕らる  
 く候しつとあつらと  
 いおとらる全作

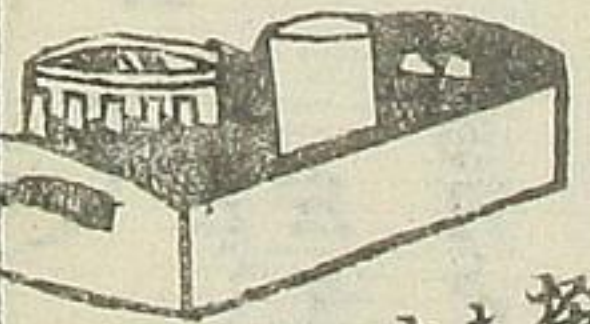


つぎ 此一件は小精さんの  
 影を心で持て私がおれ  
 押つけるといふは身でもおれ  
 へせう私お直後くいのれと  
 迷惑な後とすけがれの  
 毒もあはるまさん  
 此う前が主人の娘  
 おおや後えと又とま  
 家業をいふは私一人  
 守て形といふは後  
 親人のいと成の子ごと  
 皆負いむもあはる  
 うらなうのりり



△ 交番をか  
 ちゆる母がらう  
 跡踏る小精ハ  
 口端さ悪く

△ 以て是は病の  
 かはる強く  
 起りる後とも  
 白く眠るつけ  
 ては信持  
 田之助志女  
 寿米古の  
 名と唱び  
 病この敷  
 控は後  
 或ハ罵  
 中或ハ  
 笑ハ



△ ありあつた  
 ちとあつた  
 取つてあつた  
 後うとあつた  
 先せあつた

その思ひ  
 押子  
 合  
 後  
 五



△ 女細  
 小精  
 て  
 助  
 さ  
 ち

△ 女細  
 小精  
 て  
 助  
 さ  
 ち

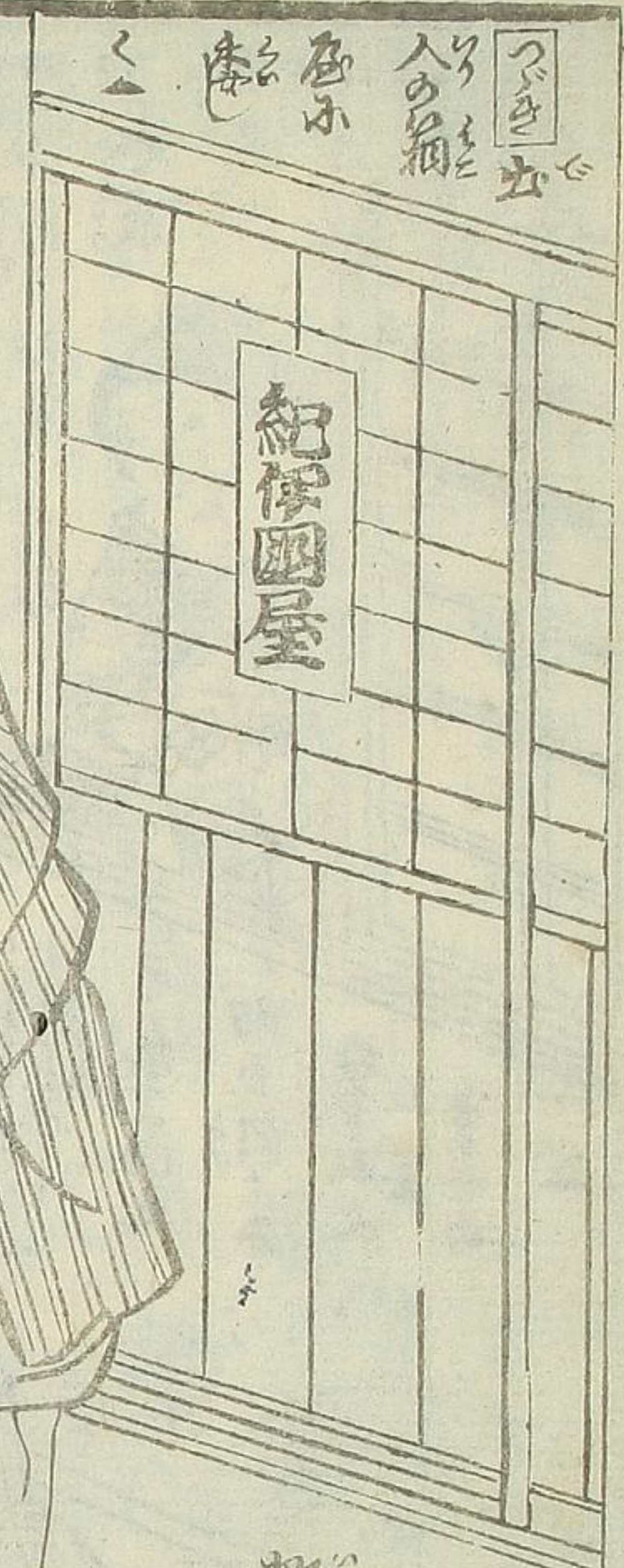
△ 女細  
 小精  
 て  
 助  
 さ  
 ち

芳川春濤 園本起泉作

幻阿竹噲聞書 三編  
 川上行義復讎新話 二編  
 澤村田之助曙草紙 五編  
 坂東彦三倭一流 三編  
 白曾阿繁顛末 三編  
 島田一郎梅雨日記 五編  
 其名高橋毒婦小傳 七編

御所櫻梅松錄 十五編  
 名所東京新圖  
 武者切附本品々  
 新形折本品々  
 石摺略曆 品々  
 編者 園本勲造  
 板主 網島龜吉

つぎに  
 人の箱  
 屋  
 へ



▲つぎに  
 今日のはは源共  
 田之助のあつて  
 男者の以上通り  
 あるや弁人のとらると  
 雁と突とあそぶとてとれと  
 ねとあつて通りと母ととらと



御届明治十三年七月三日  
 浅草区瓦町十一番地  
 出版人 網島龜吉

☒ 侍受け  
 田之助のあつて  
 如何やに編の  
 物かふれと

010190517115



沢村田之助記

五冊之内

